

# <レポート> 杏雨書屋を訪ねて

武田薬品工業・大阪工場の敷地には、公益財団法人武田科学振興財団が運営する図書資料館「杏雨書屋」があります。武田薬報では次号より、わが国の医史学研究の第一人者であり、杏雨書屋運営協議員でもある小曾戸洋先生(北里大学東洋医学総合研究所副所長・医史学研究部部长)を案内人に、収蔵される古医書や本草書に残る、現代に通じる知見や先人達のメッセージを紐解いていただく連載がスタートします。その連載に先立ち、普段は限られた研究者のみに公開されている同所を訪ね、貴重な資料の数々を小曾戸先生から読者の皆さまにご紹介いただきます。



杏雨書屋のエントランスにある杏の木

古代中国の董奉という医師は、患者からは治療代を受け取らず、代わりに軽症の方には杏の木を1本、重症の方には杏の木を5本庭に植えさせました。いつしか周辺は杏の木の林となり、それから董奉の徳を称え杏林は医学を示す言葉となりました。杏雨は杏林(医学)を潤す雨の意です。それに由来し杏雨書屋のエントランスには杏の木が植えてあります。

## 杏雨書屋が誕生するまで

武田薬品の五代当主武田長兵衛(和敬翁)は、1923年の関東大震災によって貴重な医書や本草(医療用の薬種となる動植物や鉱物)書の古典が数多く焼失してしまったことを悔やみ、それらの散逸を防ぐため私財を投じて古典籍を収集していました。その私的文庫が現在の蔵書群の原点になり、医学界(杏林)に慈雨をふりそそがせようという悲願を込めて杏雨書屋と命名したのです。

蔵書と杏雨書屋の名称は六代武田長兵衛に引き継がれ、歳月とともにその内容も充実していきます。1977年には武田科学振興財団\*に寄贈され、翌78年に図書資料館「杏雨書屋」として活動を開始しました。以来、今日に至るまで本の系統が原本に近く保存状態のよい写本や版本などを選別して収集し、資料の永久保存を図りながら学術研究に供する目的で研究者向けに閲覧を許可しています。また、年に2回の特別展示会の開催や研究講演会の開催、所蔵図書関係の出版等の事業活動を行っています。

### \*武田科学振興財団

財団法人として、「科学技術の研究を助成振興し、我が国の科学技術及び文化の向上発展に寄与する」ことを目的とし、武田薬品工業株式会社からの寄附を基金として1963年に設立。2010年12月より公益財団法人に移行。杏雨書屋のほか、研究助成やシンポジウムの開催などの事業を行っている。[URL] <http://www.takeda-sci.or.jp/index.html>

表1 杏雨書屋の主な収蔵物

国宝※1	重要美術品
説文解字木部残卷1巻 毛詩正義17冊 史記集解11冊	自筆稿本全九集 自筆稿本全九集 秘伝眼科竜木総論
重要文化財※2	その他の主な収蔵
薬種抄2巻 香要抄2巻 穀類抄1巻 香字抄1巻 古文孝経1帖 春秋経伝集解4巻 遍照發揮性靈集7巻 聖徳太子伝暦4冊 春記3巻 実躬卿記51巻 黄帝内経太素2巻 新修本草1巻 宝要抄1巻	外台秘要方残卷 備急総効方 本草衍義 経史證類大観本草 聖濟総録残巻 本草綱目残巻 香葉抄 異本病草紙 栗山孝庵自筆解剖図譜 平次郎臈図

※1 重要文化財のうち特に学術的価値が高いもの、美術的に優秀なもの、文化史的意義の深いものとして、文部科学大臣が指定した建造物・彫刻・工芸品・古文書など

※2 文化財保護法で設定された有形文化財で、文部科学大臣が重要と指定したもの

## 国宝や重要文化財も収蔵 保全と管理に絶えない苦勞

杏雨書屋の蔵書は医学書や本草書を中心に、医学史、博物学、蘭学、地誌、科学技術史、漢籍、仏典などの広い分野におよび、国宝3点、重要文化財13点、重要美術品3点を含む書籍約3万点、12万冊を収蔵しています(写真1、写真2)。わが国の医学、薬学古典籍の収集と管理において他を圧倒する規模を誇っています(表1)。また、個人旧蔵のコレクションが多く含まれている点も杏雨書屋の大きな特徴の一つです。

杏雨書屋は外部からの閲覧者に公開されていない図書資料館であるため、私たちがよく知っている図書館のように、書架の間を歩いたり本を直接手にとったりしながら資料を探すことはできません。閲覧を希望する資料は図書目録をもとに探します。これは国立国会図書館や専門図書館などで採用されている方式で、貴重な資料の紛失や破損を防ぐことができ、利用者も保存状態がよい資料を閲覧できるなどのメリットがあります。

それでは小曾戸先生に館内をご紹介します。

### ① 閲覧室

入館して、初めに蔵書目録のある閲覧室に入室します。ここで調べたい資料の目録を使って蔵書を確認し、書庫からの出納依頼を行います(写真3、写真4)。

「古典籍は年代も非常に古く、必ずしも保存状態のよ



写真3 閲覧室内の蔵書目録を閲覧する小曾戸先生

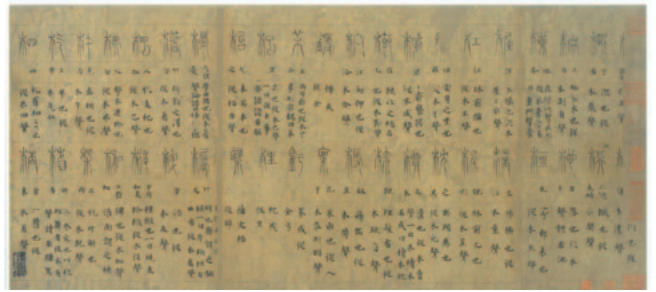


写真1 『説文解字』木部残巻

中国後漢時代に許慎(きょしん)が著わした中国最古の字書(部首、字形により漢字を分類したもの)で、9353字の文字についてその成り立ちや意味を解説している。杏雨書屋には木偏(きへん)の文字の半分弱にあたる188字が所蔵されている。(国宝)

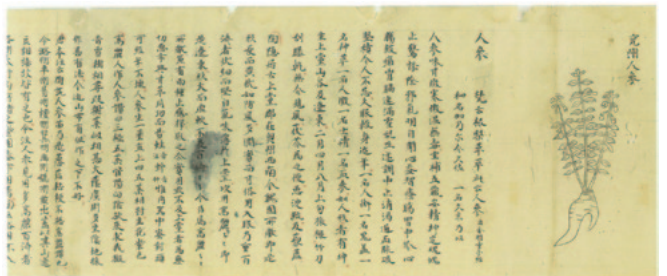


写真2 『薬種抄』

密教の修法に用いる5種の薬品を選ぶための参考書。本巻には、人参をはじめとする7種の、末巻には調梨勒(かりろく)をはじめとする10種の生薬の名前と効能、出典、図像が記載されている。(重要文化財)

いものばかりではありませんから、保全や管理にも大変苦勞します。虫食いや損傷の修理、裏貼り、和綴じなどの特殊な技術を持つ専門家と協力して当時の状態に復元して保存するのですが、それを継続するには相当な資金も必要です」(小曾戸先生)。

公益財団として経営基盤が安定していることにより、希少価値のある医学書、本草書を数多く収蔵することが可能になり、管理・保全についても通常の図書館とは異なり国立国会図書館の管理方法を取り入れています。

「製薬企業として新たな研究開発拠点を設立したり、画期的新薬の創薬に取り組む一方で、このような医学、



写真4 閲覧室で出庫された書籍を確認

薬学研究の原点ともいえる古典籍の保全、管理に尽力することは非常に意義のある社会貢献といえるでしょう」(小曾戸先生)。

## ②展示室



写真5 展示室 入口

展示室のエントランスには、1903(明治36)年から法隆寺の103世管主(住職)を40年務められた佐伯定胤<sup>さえきじょういん</sup>老師の書をもとにした篆刻(文字を彫ったもの)が展示されています(写真5)。これは五代武田長兵衛が私的文庫のために書庫を新築するにあたり、その玄関に掲げた「杏雨書屋」の扁額(門戸や室内に掲げる横長い額)で、敬愛する佐伯定胤老師に揮毫(依頼をうけて書を執筆すること)していただいたものです。額板は法隆寺を修復した際に出た古板が使われています。



写真6 小野蘭山

展示室では年2回、特別企画の展示会を開き、蔵書や巻軸に解説をつけて陳列し、来館者の参観に供しています。

訪問時は江戸中期の本草学\*1者、小野蘭山(写真6)の特別展

示が行われていました。享保14(1729)年に出生した小野蘭山は、13歳で父の師であった本草学者の松岡恕庵<sup>まつおかじょあん</sup>に師事しましたが、2年余りで恕庵が死去したため独学で本草学を研究します。25歳で私塾『衆芳軒』を開き、千人を超える門人を教えたといわれ、40年余りを教育と本草学の研究に費やし、蘭山はそれまでの中国の本草学から離れて日本独自の本草学を打ち立てます。

「蘭山は寛政11(1799)年、実に71歳の時に幕命を受けて江戸に移り、幕府の医学館に招聘されました。江戸では医官の師弟に本草学を講じるかたわら、採薬のために関東・甲・駿・紀各地をまわり、薬となる動植物や鉱物を探してその生態や形状を調べ、図譜や標本を作り数種類の採薬記を著しています(写真7)。

蘭山は75歳の時にまとめた全48巻の『本草綱目啓蒙』<sup>ほんぞうこうもくけいもう</sup>に1,882種もの植物を取り上げ、日本最大の本草学書出版する偉業を成しとげます。シーボルトはこれを賞賛し、蘭山を東洋のリンネ\*2と称したのです(小曾戸先生)。

\*1 本草学

薬用に重点を置いて動植物や鉱物など自然物を研究した中国古来の学問。

\*2 カール・フォン・リンネ

スウェーデンの博物学者、生物学者、植物学者。動植物の情報を整理して生物分類を体系化し、近代的分類学を創始した。「分類学の父」と称される。



写真7 『蘭山先生本草図』より百合(左)と番石榴(右)

## ③書庫(本来は非公開)

さらに、今回は特別に書庫も案内いただきました(写真8)。書庫内は温度22度、湿度55%に管理されており、和綴じの書籍は保存・保管のために紙と布で作られた「帙」と呼ばれる装具で被覆されています。これにも熟練した技術者の協力が必要なのです。立ち居並ぶ移動式の書庫に整列された蔵書群に圧倒されます。

収蔵される書籍も1部だけではありません。例えば『解体新書』(1774年)は6部を所有しており、オリジナルの『ターヘルアナトミア』やその異本のほか、『解体新書』が刊行される前年に発行された『解体約図』(1773年)を見ることがもできます。これは杉田玄白らが刊行を準備していた『解体新書』が発禁になるかどうかを探る目的で

発行したとされ、結果何のともがめもなく『解体新書』は陽の目を見ることになります。いわば「解体新書」の予告パンフレットの存在です。わずか5枚の紙片に過ぎなかったため、現存するものが極めて少ないのです(写真9、10)。



写真8 書庫

そのほか、医薬にまつわる多くの道具類、薬種商の

看板や百味<sup>ひくみだんす</sup>筥筒（薬を入れておく小引き出しの数多くあるたんす）、薬研（薬をつくる時、薬材を細粉にひくのに用いる器具）などのほか、宇田川玄随、玄真、<sup>ようあん</sup>裕菴と三代続いた蘭医の宇田川家蔵の蘭引<sup>らんびき</sup>（医薬調製のために使用した蒸留器）などの貴重な道具も集められています（写真11）。

「杏雨書屋の蔵書の特徴の一つに201点にも及ぶ先人医家肖像画の収蔵があります（写真12）。これらの肖像画は奈良平安時代から江戸時代までの医家にわたっています。このようにまとまって多くの医家の肖像が一ヶ所に集められているのは日本では杏雨書屋だけです」（小曾戸先生）。

そのほか医薬にかかわらない稀<sup>きこうぼん</sup>覲本なども収蔵されています。ジョン・ジェームズ・オーデュボン（John

James Audubon）による博物画集『アメリカの鳥類』（Birds of America）は、北アメリカの鳥類を自然の生息環境のなか写実的に描いた画集で、鳥が実物大の大きさと描かれており、日本国内で一番大きな本といわれています（写真13）。

写真11  
宇田川家蔵の蘭引

上部は水が満たされた冷却装置で、試料は下部で熱せられて中央部の枝部分から蒸留された液体が流出する。



写真12 曲直瀬道三肖像

狩野永徳（1543-1590）の画とされる。曲直瀬道三（1507-1594）は、病気の原因を明らかにして治療を決める医学書がなかったことから、古今の医学書から類似疾患ごとに病気の原因や治療法などをまとめた『啓迪集（けいてきしゅう）』を執筆した。時の権力者、足利義輝、織田信長、豊臣秀吉などの医療を担当。

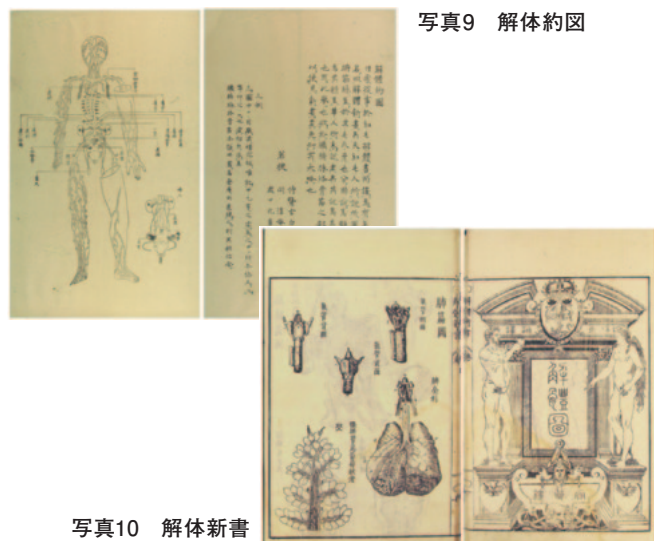


写真10 解体新書

写真9 解体約図

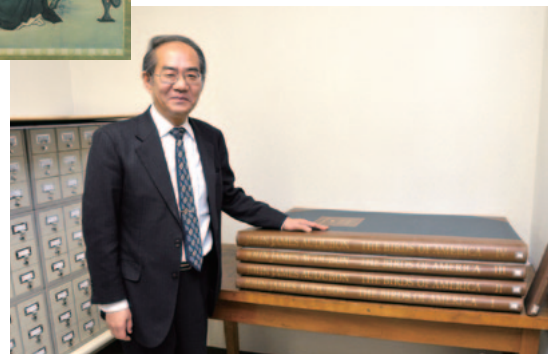


写真13 『アメリカの鳥類』（Birds of America）

## 永久に研究者へ伝え続ける使命

小曾戸先生は、最後にご自身も執筆・編集に携わった、杏雨書屋の開館30周年に際し刊行された『杏雨書屋所蔵 医家肖像集』（2008年）を手に取りました。この序文に武田科学振興財団会長であり、元武田薬品工業株式会社代表取締役会長・武田國男がよせた言葉を引用されました。

「研究というものは、過去の業績のうえに新しいことを生ぜしめる行為であります。本書を一助とし、先人医家を研究し、それぞれの医家が時代の難局に直面し、どのようにして医学の問題を解決したか、どのような業

績を挙げたか、また、それがどのように社会に役立ったかを知ることは、今日の研究への道案内をしてくれるものと思います」。

\* \* \*

古医書や本草書には先人が試行錯誤の上に築き上げてきた現代に通じる多くの知見が残されており、そこから学び取ることのできるものは少なくありません。医学、薬学において史的背景を探求することはとても価値のあることであり、将来を知るためにも過去を知ることは大切なのです。次回から、どのような古医書のメッセージが紐解かれるのか、ご期待ください。